

Glocal Tenri



11

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.11 November 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
文化的故郷と精神的故郷
／井上 昭洋 1
- 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(8)
本連載における「翻訳」について⑦
／加藤 匡人 2
- 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (16)
戦前台湾における現地人布教師の養成
／山西 弘朗 3
- ◁ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (11)
社会的養護における天理教の社会福祉活動 (1)
／深谷 弘和 4
- イスラームから見た世界 (26)
イスラームの宗教教育④—教えを学ぶこと、信仰を深めること—
／澤井 真 5
- コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (30)
7. コロンビアの非日常1：お祭りの話 その2
／清水 直太郎 6
- 天理参考館から (33)
源氏物語にまつわる一考察—高貴な女性の行為の結末—
／幡鎌 真理 7
- おやさと研究所ニュース 8

2023年豪州日本研究学会研究大会 / 国際繫生語大会で発表 / 日本宗教学会第82回学術大会で発表 / 第360回研究報告会「天理教教祖による宗教革新と教団形成」(9月11日)

巻頭言

文化的故郷と精神的故郷

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

とある先生から「全世界を異郷の地とするものが完璧だと書いてあったけれど、これはユダヤ民族のことを想定しているのだろうか？ それはともかく、そもそもおぢばは人類の故郷なのではないか？」という質問を受けた。8月号の巻頭言「全世界を異郷の地とするもの」を読んだの質問である。

1つ目の質問に対する答えはノーだ。これは、1948年のイスラエル建国まで国土を持たなかった流浪の民としてのユダヤ民族のイメージから出た質問だと思われる。国土を持たない流浪の民にとって、全世界が異郷の地であっただろうということだ。しかし、一人ひとりのユダヤ人にとって、北米であれ、欧州であれ、生まれ育った土地があったわけで、ここで言う「異郷の地とする」とは、そのような生まれ育った故郷でさえ異郷の地とするという意味である。

2つ目の質問に対する答えは、字句通りに解せば、「天理教の教えにおいて」という条件のもとイエスになる。もちろん、ここで問われているのはそのようなことではないので、少し言葉を足さねばならないだろう。聞いたかったのは、全世界を異郷の地とする完璧な者にとって、人類の故郷とされるおぢばでさえも異郷の地になってしまうのか？ということだと思われる。

この問いについては、問いの設定の仕方に問題があると言って良いかもしれない。1つ目の質問にも関わってくるのだが、2つ目の質問では2つの異なる故郷を混同もしくは同一視して問いを立ててしまっているのである。ここでサイドが引用したフーゴーの行を再度、記してみる。

故郷を甘美に思うものは未だひ弱な初心者だ。あらゆる土地を故郷とするものは既に力強い。だが、全世界を異郷の地とするものは完璧である [拙訳]。

ここでフーゴーの想定している故郷とは、文字通り自分の生まれ育った故郷であり、サイドが「文化的故郷 (cultural home)」と呼んだものである。通常私たちはこの意味で「故郷 (こきょう・ふるさと)」という言葉を用いる。

一方、「おぢばは人類の故郷」と言う時の故郷は、その人が生まれ育った故郷である必要はない。おぢばは人類が宿し込まれた場所と教えられるので、比喩的に「人類の故郷」と呼ぶのだ。よって、この故郷は文化的故郷ではなく、「精神的故郷 (spiritual home)」と呼ぶべきものである。そして、それは濃厚な物語や記憶が埋め込まれた聖地なのだ。

例えば、ゴレ島の「奴隷の家」を初めて訪れるアフリカ系アメリカ人が「帰ってきたのだ」と感じるのは、その場所に自分たちの祖先の物語や記憶が埋め込まれていると感じるからだ。おぢばも「元の理」の物語が埋め込まれているからこそ、信仰者にとっての精神的故郷、聖地となる。そして、その場所は、住んだことはおろか訪れたことさえなくても「帰る」ことのできる場所でもある。

フーゴーは、全世界を異郷の地とするものが完璧であるとした。サイドは、自らの文化的故郷でさえも異化して眺めることの重要性を説いた。では、精神的故郷としてのおぢばについてはどのような態度の信仰者が完璧であると考えられるのだろうか。私は、おぢばに帰らなくても“おぢば帰り”のできる人、どこにいても“おぢば帰り”ができて人こそが完璧だと思う。フーゴーのレトリックを借りれば、全世界を精神的故郷、ぢばとするものが完璧であると考えている。どこにいても「ぢば」を思い、親神と対峙し、世界は神の身体であることを感じるのだが、ぢばについて求められる完璧な姿なのかもしれない。

本連載における「翻訳」について ⑦

前々回(7月)、前回(9月号)にわたって、政治学者のアーヴィン・バドゥレディンの論稿を参照しながら、ハーバーマスの協同的翻訳論における「翻訳」の内実についての議論を確認した。とくに前回では、宗教的言語の「翻訳不可能性」の議論を取り上げ、ハーバーマスの唱える「翻訳」においては、宗教的言語でしか表現し得ない「翻訳不可能なもの」の存在が等閑視されていることに触れ、宗教的市民と世俗的市民が協働して翻訳に取り組む際には、その翻訳不可能性を引き受ける必要があるという主張を紹介した。

今回からは、この「翻訳不可能性」に関連する点として、著名な人類学者であるタルル・アサド(Talal Asad)が指摘する内容を取り上げていきたい。

タルル・アサドと「翻訳」

アサドは、『宗教の系譜—キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』(1993 = 2004)や『世俗の形成—キリスト教、イスラム、近代』(2003 = 2006)といった今や古典的名著となった著作で知られているが、その近著である『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』(2018 = 2021)において、ハーバーマスの議論にも触れながら、宗教的言説の翻訳可能性と不可能性についても論じている。以下では、その議論の前提となるアサドの「翻訳」概念のとらえ方に触れた上で、それが宗教的言説の翻訳のあり方を理解するのにどのような示唆を持つのかについて論じていきたい。

まず、アサドにとっての「翻訳」は、これまで連載で紹介してきた論稿で使われる意味とは大きく異なる。アサドはこの著書の序論で、哲学者のヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の概念に触れ、「言語を使用することは、ゲームをするようなものであり、計算を行うことではな」く、「ある言語ゲームを理解することは、生活様式を理解することであり、「生活様式を理解することは、その言語が諸実践の中にどのように埋め込まれ、繋ぎ合わされているかが理解でき、特定の文脈における正しい言明を認識でき、ある状況においては明らかに思える言明に異なる解釈があり得ると理解できることを前提している」と述べている(アサド 2018 = 2021:8)。そしてその上で、以前にも参照したヤコブソンの「記号間翻訳」の概念と対比させながら、「言語」と「翻訳」について以下のように述べている。

したがって、ヤコブソンの「記号間翻訳」の概念と私の見解は異なる。自然言語は、身体化された慣習を学ぶために不可欠であるが、それが最終的にもたらすものは、厳密に言えば、「非言語的記号体系の記号による言語記号の解釈」ではない。自己を涵養する慣習を翻訳として有意に記述することができたとしても、そうした慣習は(必ずしも)非言語的記号体系、すなわち意味の媒体ではない。主体にとって、それらは所与の伝統の中での生き方を学ぶ方法なのである。すなわち、言説的伝統(discursive tradition)は、単なる言語的過程ではない。それは同時に、そして第一義的には、共有された生活様式の構成員として獲得する習慣や感覚や行動に埋め込まれた、暗黙の連続性であり、ある時代から次の時代へと翻訳されるものなのである。

(同上:12、強調点は原文ママ)

すなわち、宗教伝統にある「身体化された慣習」は意味を伝

える媒体としての非言語的記号体系ではなく、「共有された生活様式の構成員として獲得する習慣や感覚や行動に埋め込まれた」ものである。記号体系としての自然言語とイコールで置き換えられるものではない、とアサドは論じているのである。

ちなみに、この引用した行をより明確に理解するには、「言説的伝統」の概念の意味を明確にしておく必要があるだろう。この著書の訳者である菊田真司は、アサド自身の言葉を引きながら、この概念を次のように説明している。

この概念の意味は、アサドによれば、「善なる行動、思考、感覚を繰り返し演じること(中略)によって、言語が、生きている身体感覚を指示し、正当化し、そこに浸透していく方法に焦点を当てること」である。アサドは、この言説的伝統は、「宗教の同義語」であり、「世俗的自由の欠如を意味している」とする。つまりそれは、世俗主義的で近代的な空間に對置されるものなのである。(菊田 2021:240)

菊田の解説によれば、宗教の同義語として使われるこの「言説的伝統」という用語を理解するには、ポイントを三つ押さえておく必要があるという。それは、(1)「それが単なる言葉や行為ではな」く、「生活様式と一体化した言葉を自らに体化することによって、自己を特定の感性を持った主体として形成していくこと」、(2)「それが『伝統』であるということ、つまり、過去から引き継がれたものであるということ」、そして(3)「伝統に基づいて自らを徳ある主体として涵養していくに際して、共同体の助けが必要であると考えられていること」の三つである(同上:240~241)。

このように眺めると、ある「宗教」すなわち「言説的伝統」の慣習を言語で記述するということは、その伝統の中で「過去から引き継がれ」て「生活様式と一体化した言葉」を、認知的に理解可能な記号体系に切り縮めるような行為とも言うだろう。菊田によれば、アサドの理解の根底にあるのは、「翻訳概念が前提としている『メッセージ』と『媒体』の分離可能性」に対する批判であり、「言語(や行為)は単なるメッセージの媒体ではなく、ヴィトゲンシュタインの『生活形式』と密接に関わっている」という点なのである(同上:237)。

このような解説を踏まえた上で、アサドが「翻訳」をどのように説明しているかを見てみよう。

ある自然言語から別の言語へのあらゆる翻訳は、いや、同一言語内の翻訳でさえ、自明かつ深い意味において、変形(transformation)である。(中略) 翻訳(というより、ヴィトゲンシュタインが言語ゲームと呼んだものにおけるあらゆる言語の使用)は、意味をなす特定の単語列が他の単語列によって置き換え得るような、純粋に認知的な行為ではない。それは、ある文脈の中で、特定の音や像、そこから生じる感情を想起させる表現の複合体であり、行動や態度を現実化するものである。(同上:13~14、強調点は原文ママ)

[引用文献]

菊田真司「訳者あとがき」タルル・アサド(菊田真司訳)『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』人文書院、2021年。

タルル・アサド(菊田真司訳)『リベラル国家と宗教—世俗主義と翻訳について』人文書院、2021年。

戦前台湾における現地人布教師の養成

現地人布教師の養成

日本で生まれた天理教の教えが、日本の統治下とはいえ異文化社会である戦前の台湾で広まり、多くの信者を獲得するためには、現地の人々の文化に根ざした布教体制が整えられることは不可欠となる。その中でも、現地人布教師の養成はその後の天理教の発展に大きな影響をもたらすこととなる。

日本から台湾へ渡り布教を行った人々によって、多くの場合は病気の平癒という不思議なすけを通じて天理教の教えが現地の人々に広まる。そして現地の人々がそのたすけられた恩に報おうと、熱心に天理教の教えを学び、自らもおたすけ人として、今後は人をたすける立場へと成長していく。これが、台湾で天理教が発展していく循環モデルとなる。このような現地人信者の人材養成が、戦前の台湾においてどのように行われたかについてふりかえりたい。

おちばがえりと授訓（さづけの理拝戴）

多くの場合、病気平癒という形で、親神の存在と不思議なはたらきを知ることで、入信を決意した現地人信者は、まずそれぞれが導かれた教会のもとで信者として養成されることになる。主に教会において教会長やその家族、信者同志で天理教の教えについて理解を深め、毎日教会に参拝する日参や教会の月次祭への参拝、朝夕のおつとめの実行、ひのきしんの活動や、においがけの実践がなされることとなる。また、たすけていただいたお礼として教会へのお供えを続けるようになる。このように信者としての意識を高め、人にたすけられる立場から人をたすける立場へと成長していくためには、おちばがえりを行い、授訓、つまりさづけの理の拝戴が重要となる。

そこで、台湾の各教会はおちばがえりの団参を計画し、現地信者を率いて日本内地にあるおちばへ足を運ぶこととなる。当時台湾からおちばがえりをするためには、現在よりも多くの費用と日数がかかり、決して容易なことではなかった。しかし、そのように容易ではないおちばがえりをするのが、おちばがえりができる感動を一層大きなものにしたと考えられる。これまで話で聞いていたにすぎなかっただけに、親神が鎮まり、人類が創造され、世界たすけの根本としてかぐらづとめがつとめられるちばとそれを囲む神殿に足を運ぶことができた台湾の信者の喜びは想像に難くない。

さて、せっかくおちばに足を運ぶことができた人々が、特に病気をたすけるために拝戴できるのがさづけの理である。このさづけの理は、天理教の布教師が病気に苦しむ人々に直接取り次ぐことによって親神によるたすけ（この場合は病気平癒）を顕現させるものである。

さづけの理は、おちばでのみ設けられている「別席」で9回天理教の教えの話聞くことで、回を重ねるなかで心が生まれ変わり、親神の思いが心に治まることで拝戴できる。さづけの理を拝戴することで、現地人布教師としてさらに活発に布教活動を行うことができるようになる。このさづけは台湾で布教を展開する上で重要な役割を果たしたと言える。というのも、台湾には、漢人の民間信仰における「取驚」(台湾語)と呼ばれる呪術的な病気平癒の儀礼が広く受け入れられる文化的素地があるからだ。

天理教校別科入学

天理教校別科は天理教校の組織変更に伴って明治41(1908)年3月に天理教教師養成機関として本科と共に設置され、本科は1カ年、別科は6カ月だった。天理教校別科は天理教の布教を担う人材養成機関で、おちばで6カ月間共同生活を行い、天理教の教義を学び、おつとめの修練などを通して天理教教師を養成した。とくに台湾で活発に布教活動をするようになった現地人布教師は別科の卒業生で、多くの信者を導くなかで布教所長などの立場に立ち、リーダー的役割を担うこととなった。ちなみに、天理教別科は昭和16(1941)年に改編され、さづけの理を拝戴するための教育機関として修養科が生まれた。修養科の期間は3カ月で、この間に9回別席を運ぶことで卒業とともにさづけの理を拝戴することができる。この制度は現在に続いている。

天理中学校への内地留学

戦前は台湾が日本統治下であったため、公用語は日本語、統治機構も日本人中心であった。したがって、台湾人が内地へ留学することは、日本語能力を高め、学歴を得ることで台湾で社会的に高い地位を担う方法であった。さらに、天理教はおちばでの伏せ込みを重視することから、台湾人信者やその子弟をおちばにある学校に留学させるということも広く見られるようになった。たとえば、台湾中南部の農村出身者が内地留学として天理中学校で学び、後に地方官吏になったり、雑貨店などを営むようになり、戦後も引き続き教会をいろいろな方面から支えたという事例もある。特に中学時代の時期を日本人と共におちばの学校で過ごした経験と育まれた友情は、民族の違いを超え、統治する側・される側という単純な二項対立の関係をも超えた、人間としてのかけがえのない絆を醸成し、戦後も天理教における内地人と台湾の人々との交流は続いていくこととなった。

天理教台湾講習所開設

最後に、昭和17(1942)年に台湾伝道庁に開設した台湾講習所について紹介したい。長年外地における布教師養成が懸案となっていたが、天理教校台湾講習所として満州講習所とともに設置された。台湾伝道庁内に講習所の施設が建設され、所長には当時庁長の上原繁雄が就任した。この講習所は現地人教師の養成を目的とするもので、修養期間は6カ月、第1期は10名を收容し、次第に拡充を図ることになっていた。当時台湾には36カ所の教会があり、より一層現地人伝道に邁進しようとしており、現地人の布教師養成は大きな成果をもたらすものと考えられた。ところが終戦により、昭和20(1945)年に開講から4年で閉鎖を余儀なくされた。台湾講習所の卒業生は62名を数えた(内地人と現地人との内訳は不明)。

ちなみに、朝鮮講習所は大正8(1919)年に天理教朝鮮布教管理所内に開設された天理教朝鮮教義講習所が前身であり、昭和4(1929)年からは入所者を朝鮮人に限定した。昭和10(1935)年に天理教校に編入され、天理教校朝鮮講習所と改名した。50期まで行われ1,023名が卒業、2期まで行われた専科の卒業生も合わせると、1,245名が卒業している。

[参考文献]

上村福太郎(1976)『潮の如く』(下)、天理教道友社。
天理教校(2000)『天理教校百年史』天理教校。

社会的養護における天理教の社会福祉活動 (1)

天理大学人間学部准教授
深谷 弘和 Hirokazu Fukaya

「社会的養護」とは、保護者のいない子どもや、虐待や家庭内暴力などによって家庭で養育を受けることが困難な子どもに対して、公的な責任によって、社会的に養護をおこなうことである。日本で社会的養護は、施設やグループホームで行われる「家庭的養護」と、里親やファミリーホームで行われる「家庭養護」の2つに大きく分類される。従来は、民法上の親子関係がないという意味で、里親を「家庭的養護」と表現するのが一般的であったが、2011年に国の検討会がまとめた「社会的養護の課題と将来像」において、社会的養護で保護される子どものうち、おおむね3分の1が里親に委託するべきという方針が出た。それに伴い、概念の変更がおこなわれ、里親は「家庭養護」と分類されることになった。

天理教の社会福祉活動のなかでも、社会的養護の活動は、最も長い歴史を持つ。天理教の社会福祉活動のはじまりである天理教養徳院（現：天理養徳院）は、現在まで、児童養護施設として、社会的養護を担ってきた。また、地方でも農業に従事する人たちの子どもを預かる季節託児所が展開されるなど、社会的養護につながる活動がおこなわれてきた。

施設における社会的養護

天理教の社会福祉活動の歴史的展開でも整理したように、1948年に「三大方策」が発表され、全国に天理教徒によって社会福祉施設が設立された。それらは、現在「天理教社会福祉施設連盟」として、児童、高齢、障害など約120の施設が加盟し、研修会などを通じて交流をおこなっている。そのうち、社会的養護を担うのは、児童養護施設、乳児院、母子生活支援施設である。代表的な施設として、天理養徳院と同じく社会福祉法人天理を母体とする天理教三重互助園や、東本大教会の調布学園、越乃国大教会の白梅学園、西海大教会部内蒲池分教会の白梅学園、高安大教会部内紀北分教会の六地学園などがある。これらの児童養護施設では、初代真柱が天理教養徳院の設立時に詠んだ「人の子も我が子もおなじころもて おふしたててよこのみちの人」という和歌を指針としているところもある。

近年、児童養護施設は、地域化、小規模化がすすめられている。例えば、天理養徳院では、本体施設は小舎制と呼ばれる玄関、キッチン、ダイニング、リビング、浴槽、トイレなどの設備が独立したホーム単位での養育が、5～6人の子どもを対象としておこなわれている。また、本体施設と離れた場所に、一般家庭の住居と同じような建物があり、グループホームとして養育がおこなわれている。

先述したように、国の政策としては、施設養護から里親を中心とする社会的養護が推進されている。そのなかにおいて、児童養護施設では、発達や愛着などに課題のある子どもや、思春期など高い年齢の子どもたちの入所が増えており、より専門性の高い養育が求められるようになってきている。各地の児

童養護施設では、地域社会との接点を求めているところが多い。社会的養護に取り組んできた天理教が、教会を通じて、児童養護施設との接点を持つことも、今後の社会福祉活動においては重要な点になるといえるだろう。

ひろがりをもせる里親活動

里親制度は、児童相談所で家庭からの分離が必要であると判断された子どもを、里親登録した家庭で養育するもので、戦後、1948年の児童福祉法の施行により制度化された。現在、里親研修を修了し、認定を受けることで里親登録をすることができる。天理教では、里親制度ができる以前から、教会を中心に子どもに限らず、生活に困難を抱える人や、身寄りのない人と暮らしてきた歴史があり、里親制度は、それに追従してきたものとの認識が強い。そのなかにおいて、里親制度そのものの行き詰まりが危惧される社会状況を踏まえて、1981年に宗教団体としては初の「里親会」が発足し、現在は「天理教里親連盟」として活動が続いている。2023年11月には、40周年記念大会が開催される。

2020年度の行政報告によれば、養育里親が11,853世帯となっているが、そのうち、天理教里親連盟に登録している里親は、約650名（2022年）となっており、全体の5%を天理教の里親が占めていることになる。八木三郎の論文「社会的養護における天理教里親の意義」（『天理大学おやさと研究所報』第17号、2010年）では、天理教の里親は、里親登録後に実際に委託されている割合が、一般の里親よりも高くなっている点に注目しており、日本社会において天理教里親が、大きな役割を担っていることがわかる。

こうした天理教里親の信仰的なベースとして取り上げられるのが、先述の初代真柱の和歌に加えて、『稿本天理教教祖伝逸話篇』「86 大きなたすけ」にある「人の子を預かって育ててやる程の大きなたすけはない」との教祖の言葉である。天理教里親連盟では、「天理教里親信条」を掲げ、活動がおこなわれている。

繰り返し述べてきたように、政策として社会的養護において里親が重要視されるようになったことになり、天理教の里親活動はひろがりをもせている。児童虐待の相談件数が増加するなかにおいて、児童相談所の一時保護所が定員を超えてしまい、里親をしている天理教の教会に一時保護を委託するというケースもある。また近年では、長年、里親に取り組んできた教会で、ファミリーホームを開設するところも出てきている。ファミリーホームは、実子を含まずに、5～6人の子どもを3人以上の養育者で養育する事業で、法人格を取得していなくても、里親からの移行であれば個人でも運営主体になることができる。

こうした社会的養護を通じた社会福祉活動が、里親をする信仰者、あるいは里子たちにどのような気づきを与えたのかについては、次回、整理していくこととする。

「頭でっかち」とは

日本語には「頭でっかち」という言葉がある。この言葉は、知識を詰め込んで理屈ばかりを言う人、物事を素直に受け取ることができない人を指して用いられる。いわば、知識を得ることの否定的側面とでも言えるかもしれない。今回は、「教えを学ぶこと」と「信仰を深めること」の“あいだ”について、イスラームを代表する神学者であり神秘主義者であるガザリー (Abū Hāmid al-Ghazālī, 1058 ~ 1111) を取り上げ、知識の探究という視点から考えてみたい。

確実さの3つのレベル

イスラームでは、教えを深めることは知識を得ることであるとみなされているように思われる。筆者が理解する限りでは、信仰篤きムスリムたちは次のように考えている。「信仰とは神を求めることである。神を求めるには、神やイスラームという宗教についてもっと知らなければならない」と。その結果、漠然と信じるというレベルから、教えを信じ深めるというレベルへ進むために、教えを学ぶという段階へ進む。その手段の一つが書籍から得られる知識である。

イスラーム神秘主義思想では、私たち人間が確実なものともみならず知識として、次の3つのレベルを想定する。①「確実さに関する知」(‘ilm al-yaqīn)、②「確実さの本質」(‘ayn al-yaqīn)、③「確実さについてのリアリティ」(ḥaqq al-yaqīn)。これら3つは原文で表記する方が語感が良いように思うが、可能な限り意味を日本語で説明するため、少々ぎこちない翻訳となっている。

第1レベル「確実さに関する知」とは、私たちが日常的に接している事物の存在を、知を通して確実なものとするのである。私たちは見たことも聞いたこともない事柄であっても、知識として理解することが可能である。例えば、火という存在を知らなくとも、その存在を言語的に説明することができる。目に見えないが概念として存在しており、私たちは言語を通してその存在を知っている。

第2レベル「確実さの本質」とは、ある存在の本質を通して確実なものとするのである。たとえば、炎を発しないが赤く光る炭を見てそれを「火」として認識し、遠く見える太陽の本質を「火」として認識する。いずれも肉眼で火を確認できていなくとも、物事の本質を理解している。

第3レベル「確実さについてのリアリティ」とは、ある事柄をリアルなかたちで体験することによって、確実さを得るレベルである。私たちの身体が炎にくるまれるとき、火のリアリティを身をもって体験する。あるいは、私たちが火そのものとならないと、私たちは火という存在について真の意味で確実に知ることができる。

したがって、「火」という存在を私たちのなかで確実なものとするためには、私たちはそのリアリティを知るしかないのである。「火」を「神」や「神の言葉」に置き換えるとき、私たちはそれらを確実に理解できたと言えるだろうか。

ガザリーが到達した確実さ

世界史の教科書で扱われているイスラームの内容は限られている。しかし、ガザリーはイスラームを代表する思想家として登場する数少ない人物である。ガザリーも「確実さに関する知」という言葉を用いているが、彼はそれを、「一点

の疑念も残らず、誤謬や妄念の可能性もなく、それらを想定する余地すら残さないような形で、知の対象を明らかにする知」と理解する⁽¹⁾。

ガザリーは若くしてイスラーム諸学を修めるとともに、時の権力者に引き立てられることで、バグダードのニザーミーヤ学院で教授する立場にあった。いわばエリート中のエリートであった。しかし、彼は1095(ヒジュラ暦488)年に学院を離れて、11年間の隠遁生活を始めた。知識を教授する立場にあった彼が教授職を離れた最大の理由は、自らの知識をもちや確実なものと考えられなくなるという精神的葛藤にあったと思われる。

彼の状況を先の3つの確実さからみれば、彼は教えを第1レベルと第2レベルまで理解していたが、第3レベルには達していなかったのだと言える。もちろん、彼は当時の最大の思想家の一人であり、彼の精神的葛藤は私たちと次元が異なると考えなければならない。アシュアリー派の神学者として、彼は神、聖典クルアーン、またハディースなど、イスラームに関わる学問を教えていた。しかしながら、自分自身が真の意味で神を理解し、教えを理解しているかと言われたならば、そうではないと考えたのだろう。

そこで、彼はすべてのものを投げ出し、スーフィーとして隠遁し、神に専心する生活を始めた。彼は知識を得ることの傲慢さや、実生活で体現できていない人々の心の弛みを批判する。その後、彼は突如として権力者から第一線に再び呼び戻され、隠遁生活から復帰した。彼は隠遁生活から俗世へ「帰る」ことについて、次のように述べている。

私にはわかっていることだが、たとえ私が知識を広めるために帰るということになったとしても、私は同じ所に帰るわけではない。というのは、「帰る」ということは、過去の状態に戻るからだである。私は以前は、名声を与えてくれる知識を広め、私の言葉と行為によってそれを奨励していたし、それが私の意図であり、目的であった。ところがいまは、私は名声を棄てさせ、名誉ある地位を落とすと知られている知識を進めているのである⁽²⁾。

神学や法学を通して知識を学ぶことこそが、教えを学ぶことであると考えられてきた一方で、彼はもはや「同じ所」に帰ることはない。信仰のレベルを深めた彼は、概念や頭で分かっているだけでは確実ではないと主張する。むしろ、身をもって神を知り教えを学ぶことの重要性を説くのである。しかしながら、彼は既にある神学や法学を学ぶこと自体を否定したわけではない。教えを知ろうとしない人間は論外だが、教えを知っているからと傲慢になってはいけない、と述べているのである。

「教えを学ぶこと」と「信仰を深めること」の“あいだ”にあるものとは何か。「頭でっかち」ではいけないが、何も知らずに体を動かしていればよいというわけでもない。本当の信仰とは、両者をより高めていくことでしか到達できないのかもしれない。

[註]

(1) ガザリー『誤りから救うもの』(中村廣治郎訳) ちくま学芸文庫、2003年、15～16頁。

(2) 同上、95頁。

7. コロンビアの非日常 1 : お祭りの話 その2

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

7.1.2. 大衆フィエスタモドキ

ある新聞記事に「コロンビアはラテンアメリカで最もお祭りが多い国です。年間 3,400 以上のパーティが開催され、祭日の数は 1 万を超えます。問題はほとんどの場合カレンダーに現れないことなのです。」⁽¹⁾とあった。1 万もの祭典日など矛盾に見えるが、国の歴史を考慮するなら、このニュアンスはおそらく正しい。これが意味するのは、彼らの日常がもはや非日常であり、そこには深く、民族としての成り立ちがかかわっているのだ。

*反省

13 年前 (2010 年 11 月) コロンビア出張所に所長として赴任した際、私は気負っていた。「さあ、ここで思いっきりやるぞ〜」と、意気込みすぎているのかもしれない。また、着任から 1 年後に迫った出張所の創立 40 周年に向かって、あれもしなければ、これもしないと自分の思いばかり先行していたのかもしれない。以前、私は所員として在住していたのにもかかわらず、コロンビアという国とその文化や風習について知ったかぶりになっていたのだった。というより、日本で行う「モノ」をそのまま当てはめていたのだった。

出張所という「ミッションセンター」の機能を高めようと、天理教の「教理勉強会」「信者の決起の集い」「勤行 (おつとめ) 研修会」などを立て続けに開催していった。もちろん大半の信者は週日には仕事を持っているので、その行事のほとんどが週末、祝日に集中した。最初、人は集まった。が、少しずつ参加人数が減ってきた。ある集会の日に信者さんの一人が言った。「センセ、なんで今日やるんですか? 今日何があるか知っていますか? コロンビアナショナルチームの試合じゃないですか? 大事なワールドカップの予選リーグなんです! 一緒に見ましょうよ!」そこで、話し合いを早々に切り上げ、みんなと予選リーグをテレビで観戦した。

そういうことを経験して、だんだんと理解してきた、「郷に入れば、郷に従え」ということを。このコロンビアではサッカーの試合も自分たちの「非日常」であり、楽しみの一つなのである。性別は関係ない。男も女も時には顔に黄・青・赤と三色に「化粧」し、我を忘れて叫び、踊り、全身を駆使して応援する。ともあれ、出張所の創立 40 周年は成功したが、自分の中では完全に「空回り」をしていた、と反省した。

スポーツ観戦は、彼らの非日常であることは間違いないと思う。米国の野球観戦も日本のそれとは違い、家族や友人がまるでピクニックに行くような気分で見ているのがわかる。コロンビアでは以前、サッカー観戦に「アルコール飲料」はつきものであったが、必ず問題を起すので現在では禁酒となっている。

さて、スポーツ観戦やプレイの他、「フィエスタモドキ」として思いつくのが次の 2 つある。

*フィンカ (農場: 別荘) で過ごすこと

コロンビアの人は、休日が続くと旅行か「フィンカ」に行く習慣がある。フィンカというのは辞書では「農場」と訳されているが、農業従事者が栽培や牧畜を目的として所有する農場ではない。むしろ別荘というニュアンスに近い。自分が所有していなくても親、親戚、知人の誰かが持っている。別に上流階級でなくても、中流以上なら、誰かしら持っている。規模がさまざまであるが、フィンカは国民の非日常とは切っても切り離す

ことができない。

聖週間、長期の休み、年末・年始以外にも、「プエンテ (橋)」という日曜日と祝・祭日を連結させる連休に何回も出かけて数日間を過ごし、日常から離れ心身ともに「リセット」するのがフィンカの機能だろうと思う。家族や知人とただ過ごすか、同僚と過ごすかして休日の別荘暮らしを楽しむというところであろうか。

*誕生日や結婚などのセレモニーが重要であること

誕生日は、ラテンアメリカでは欠かすことのできない年中行事にも匹敵する「非日常」行事である。学校関係では幼稚園児時から仲の良い友達の誕生日には招待される。招待されるからこちらも招待する。その連鎖反応である。また、仲間、同僚においても誕生日には祝う。その祝い方は、それぞれパーティを開いて親戚、友人を招待したり、職場でケーキだけを用意して、ハッピーバースデーを歌ったりと、千差万別である。決して忘れてはいけない、なぜこんなにもコロンビアでは誕生日に重きをおくのだろう、ということ。私の拙い想像力によると、この治安の状況で 1 年無事に過ごすことができたことに対して、神への感謝の気持ちが人々のバースデーへの熱き思いへと変化するのもかもしれない。

また、米国発祥であるとされる「ベビーシャワー」も、この誕生日に匹敵するほど重要視され、また必ず開催される。言葉通り、雨のごとく降り注ぐシャワーのように出産を間近に控えた妊婦にプレゼントを送ることである。米国では、現在どのようにベビーシャワーが行われているか情報を持たないが、コロンビアでは、この会に出席するのはほぼ女性のみということになっている。

7.1.3. 伝統的フィエスタ

冒頭にも言及した「深く歴史がかかわっている」ということを説明して、次回のための序文としたい。

カレンダーに現れないということは、あくまで現在のカレンダーに現れない、ということであって、先住民にはそれぞれの民族の暦がある。また奴隷制度があったコロンビアにはアフリカ系の人が多く入り、少数ながら彼らにもそれぞれの暦があったに違いない。

マルコス・ゴンザレスというコロンビアの歴史家は、祭日やお祭りの研究に携わっている。彼は、コロンビアの首都ボゴタ地域において「ボゴタの先住民のカレンダーを調べると、先住民の民族信仰、神話や神々、豊潤が折り混ざっている。基本的には太陰暦である」と言う。⁽²⁾

中世、スペイン人が中南米を征服した際、文化の支配があった。例えば、先住民の宗教施設の上にキリスト教の教会を設置する抑圧政策も行われた。ヨーロッパ人が中南米に持ってきた暦に、キリスト教の祭日が多いのは当然である。また、独立してから、愛国心を養うために、独立記念日や独立戦争最後の戦いも祭日となっている。

これを踏まえて、今回は伝統的フィエスタについて詳しく述べていきたい。

[註]

(1) <https://www.eltiempo.com/archivo/documento/MAM-1636591:EL TIEMPO> 2005 年 2 月 10 日。

(2) 同上

天理図書館開館 93 周年記念展「源氏物語展—珠玉の三十三選—」が、10月18日(水)から11月27日(月)まで、天理参考館3階企画展示室において開催されている。紫式部が平安時代に書き下ろした典雅な物語は、時代を超えて脈々と読み継がれ、わが国で最も有名な文学作品の一つと言える。この作品が文学だけでなく、あらゆるジャンルの日本文化に与えた影響は計り知れない。印刷技術が生み出されるまで、古典籍は人の手によって書き写されてきた。読みたいと思う人が多いからこそたくさんの写本が生まれたのである。現時点で平安時代の『源氏物語』の伝本は確認されておらず、鎌倉時代のものが最古の写しとされている。

そのうちの一つ、天理図書館蔵『源氏物語』国冬本が今年6月27日付で国の重要文化財に指定された。これは、鎌倉末期成立の12冊と、室町末期に補われた後補42冊から成るもので、住吉神社神官で歌人としても名高い津守国冬(1270～1320)の筆と伝えられている。国冬は摂津守にまで上りつめ、兵庫嶋などの関所の徴税権を巡って東大寺と争論に及んだ、なかなか意気盛んな人物だが、この本は匂い立つように優美である。表紙は柘目ごとに花鳥を織り出した緞子で彩られ、各冊それぞれに色を変えた誠に美しい装幀になっている。期間中展示されるので、この機会にぜひご覧いただきたい。これらが収められた豪華な蒔絵箱に描かれているのは、光源氏が幼い若紫を垣間見ている有名な場面である。これに関連して、高貴な姫君の振る舞いの、当時としては型破りな行動について言及したい。

紹介したいのは二つの場面(ともに展示No.21『源氏物語 奈良絵本』参照)である。先に述べた北山の僧坊で光源氏が幼い紫の上を初めて垣間見る「若紫」と、柏木が御簾から姿を現した女三宮を目で捉える「若菜上」である。どちらも出会った瞬間に恋に落ちた、とてもドラマティックで有名なシーンだが、その姫君二人の登場の仕方が当時としてはとてもセンセーショナルなのだ。紫の上は「十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの、なえたる着て走り来る女子」として光源氏の前に現れ、「あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生い先見えてうつくしげなる容貌なり」と、瞬時に彼の心をつかむ。しかし、貴族の姫君が、十歳にもなって「走ってくる」ことは当時としては考えられない。「立ち居振る舞い」というごとく、必要なときは静かに立って、それ以外はおとなしやかにその場に居るものだった。移動が必要な場合は、侍女の女房たちに脇を抱えられるように静かに歩を進める。庶民であっても「走る」ことは異常な行動と見なされ、異界に行ってしまうのではないかとそれを見た人々が恐れおののく、そういう時代である。親代わりの尼が嘆いたのは、犬君が逃がしてしまった雀のことで騒ぎ立てることも含め、紫の上の貴族の姫としての振る舞い全般だったろう。「後ろ盾もなく、年老いた尼が育てた姫などやはりねえ…」と思われることを尼は恐れた。良いお相手の殿方は現れまい、と。

ある種「不用意な」行動を取る最上流の女性のもう一方が、光源氏の正妻となる女三宮である。若菜巻は『源氏物語』54巻中で最も長いため、唯一「若菜上」「若菜下」と上下に分か

れている。紫式部も、特別の思いを込めて筆を進めたのではないか。ここで登場する女三宮は、光源氏の兄である朱雀帝の三番目の娘で、当時最高級の女性である。しかしいざ結婚してみると、彼女は気配りに欠け、文章は幼稚で、思ったそのままを口にする無邪気なだけの少女だった。光源氏はひどく失望する。最愛の紫の上を傷つけてまで手に入れたい女性であったのか、と。光源氏の邸宅六条院で蹴鞠の会が催されたある日、夕霧や名足(蹴鞠では名手ではなく、名足と称する)の柏木が華麗な足さばきを見せていた。そのとき、猫が室内から走り出たために、猫の紐が御簾に引っかかってまくれ上がり、あろうことか庭から室内が丸見えになってしまう。その場に無防備に立っていたのが女三宮その人である。柏木も求婚していたが得られなかったその憧れの女性の姿を、白日の下に目にした柏木は胸を震わせる。室内があらわになったことにまだ気づかない女房たちに夕霧は咳払いで警告し、ようやく女三宮も奥に退いた。当時、上流の女性が夫や親兄弟以外に顔を見せることは、あってはならない恥ずべきことだった。御簾のそばまで出て来てぼんやり立っているのではなく、常々光源氏に言い含められていたように奥で静かに過ごしているべきだったのである。女三宮の周囲で仕える女房たちは、蹴鞠見物に夢中になって、室内が丸見えになったことにも気づかないような、今日言うところの「危機管理能力に欠ける」者ばかりだった。このように常識に欠けた最上流の姫君の行動が、女三宮自身をこの後悲劇へと導いていく。

紫の上にとっても、「若紫」での振る舞いが光源氏と出会う好機となったものの、「若菜」での女三宮の振る舞いによって結局全て禍に転じてしまう恐ろしさを見せつける物語の展開である。紫式部の伏線であろうか。現在伝わる54巻それぞれの名称は、紫式部自身がつけたとする説と、後世のものとする説が存在する。作者自身がつけたかどうかについて、直接肯定ないし否定する証拠は見つかっていないらしい。いずれにせよ、このなかで「若」が付く巻名はこの2つしかない。紫の上と女三宮という高貴な女性の「若気の至り」の振る舞いが、光源氏を挟んで対峙する興味深い巻と言える。

これらを頭の片隅に置いて、展示室で美しい源氏絵を鑑賞していただきたい。併せて、「若菜上」の、細身で精悍な、いかにもやんちゃそうに描かれている唐猫にもご注目ください。



天理図書館開館 93 周年記念展
「源氏物語展—珠玉の三十三選—」チラシ

2023年豪州日本研究学会研究大会 / 国際繫生語大会で発表

尾上 貴行

9月1日から3日にかけて、2023年豪州日本研究学会研究大会 / 国際繫生語大会 (JSAA-ICNTJ2023: Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia 2023/ International Conference of the Network for Translingual Japanese) が、「ポストコロナの社会を生きる：人とことばの移動、越境、融合 (つなぐ、わたる、のりこえる)」(Living in a post-Covid Society: Mobility of People and Language across Borders for Social Integration) をテーマとして、オーストラリア・シドニーで開催された。

この大会では、日本研究とその関連分野、また繫生語／継承語に関わる研究者・実践者が世界各地から参集し、オーストラリアや日本の国内外における日本研究、世界各国の繫生語／継承語としての日本語教育・学習に関する研究に関して、3日間にわたり主にシドニー大学とニューサウスウェールズ大学を会場として、多様なパネル、分科会、ワークショップなどが開催された。

尾上は、大会2日目の午後に「Japanese Religion and Japanese Language Education in Australia: A Case of Tenrikyo Oceania Centre's Japanese Language Class in Brisbane」(オーストラリアの日系宗教と日本語教育—ブリスベンの天理教オセアニア出張所日本語教室を事例として—) という演題で発表した。ブリスベンにある天理教オセアニア出張所では、1998年から現在に至るまで、布教活動を推進する目的で、地域社会への社会・文化活動の一つとして日本語教室を行っている。本発表ではこの日本語教室を事例として取り上げ、日系宗教の文化活動、特に日本語教育が、オーストラリア人への布教活動や宗教団体としての現地社会への定着においてどのような意義を持つのかについて考察した。

日本宗教学会第82回学術大会で発表

堀内 みどり

9月8日から10日にかけて標記学術大会が東京外国語大学府中キャンパスを会場に開催された。コロナ禍後初めての対面のみでの大会だった。8日には開会式の後、公開シンポジウムが「教育とイスラーム—公教育から見た宗教文化の多様性—」をテーマとして開催された。

9日及び10日には、11の部会で個人研究とパネルの発表が行われた。天理大学関係者の発表は以下の通り。

澤井義次：シャンカラ派信仰の意味論的理解 (パネル「宗教学における知の枠組みの再検討」代表)

澤井真：聖者が織り成す世界—霊的権威としてのイスラ

ム神秘主義 (パネル「イスラームの聖者論と権威」代表)

金 博城：天理外国語学校の設立と朝鮮布教

澤井治郎：天理教における教会のはじまり

岡田正彦：明治改暦と近代仏教 (パネル「明治改暦 150年に近代日本を問う」)

深谷耕治：天理教の里親活動における「おつとめ」の位置づけ

堀内みどり：「親心」とは何か—教理と信仰実践についての一考察—

また、他に天理教関連の発表が三つあった。

道蔭汐里 (東京工業大)：新宗教教団が実施する「教祖祭」の意義と役割

青木 繁 (東京工業大)：天理教の社会貢献活動—地方教会に焦点をあてて—

坪井俊樹 (東京大)：若者と宗教—コロナ影響下の若者の宗教活動・新宗教公式メディアの語りから—

第360回研究報告会「天理教教祖による宗教革新と教団形成」(9月11日)

岡尾 将秀

博士論文を出版のために書き直すという目的で、そのための構想を発表した。博論では既成宗教と異なる宗教が形成されることを「宗教革新」と捉え、その過程を「民俗宗教」、「民衆宗教」、「新宗教」、「伝統宗教」という四つのカテゴリーで区分した。だがこれらのカテゴリーは、日本の諸宗教を分類するために各学問領域で慣習として使用され、天理教は社会思想史では民衆宗教に、宗教学や社会学では新宗教に分類されてきた。したがってこれらのカテゴリーを、一宗教の形成過程を区分するカテゴリーとして使用するという提案は受け入れられ難い。今回は宗教の教義、儀礼よりも教団の形成を捉えるために、「宗教家族」、「宗教ネットワーク」、「宗教組織」、「宗教制度」というカテゴリーを設定し直した。

これらのカテゴリーによって、教祖在世期の教団形成を区分すると、中山家が地主農家として所有していた家屋を立教以降、売却していく過程も、宗教家族の段階として考察できることが明らかとなる。また教祖が信者に教示した儀礼実践を、教祖の家族が他の家族や地域社会の有力者に承認してもらうために、既成宗教に所属することは、いまだ宗教制度の段階と見なせないことが明らかになる。しかしそのことが、教祖による当初の教えの既成宗教に代わる展開を促し、宗教ネットワークから宗教組織の段階へと移行させたことも明らかになる。

グローバル天理

第24巻 第11号 (通巻287号)

2023年(令和5年)11月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan